

事例番号 131 元祖「レトロなまちづくり」(福岡県北九州市・門司港)

1. 背景

門司港は 1889 年に国の特別輸出港に指定されて大陸貿易の基地としての役割を担い、多くの企業が事業所を構えて一時は神戸港を抜き入港船舶数日本一の時代を築いたが、戦争による大陸との交流断絶等を機に急速に衰退し、船だまりや多くの建造物が利用されないまま取り残される状態となった。そして 1985 年以降、市から船だまりの埋め立てと歴史的建造物(旧門司三井倶楽部)の解体の案が相次いで持ち出されたが、地元の複数コミュニティから反対の声があがり、それを機にそれらコミュニティと北九州市との連携によるまち再生の取り組みが始まった。

旧門司三井倶楽部(三井物産門司支店迎賓館、1921 年築)の解体計画が持ち上がったのは 1987 年であった。それは国鉄民営化を直接の契機とするものであった。それに対して市民の間から保存運動が巻き起こったことから、北九州市は門司港の歴史的建築物と自然とが一体となった新しい観光地をつくる「門司港レトロプロジェクト」を立ち上げることとした。市はプロジェクトを推進するにあたり、旧文部省に働きかけて旧門司三井倶楽部を国指定重要文化財にするとともに、旧自治省の「ふるさとづくり特別対策事業」に申請してその保存事業を門司港レトロプロジェクトの主要事業として位置づけた。また、庁内関係部局の足並みをそろえるために「レトロ事業推進室」を設置した。

一方、民間有識者等により組織された検討会「門司港地区開発アドバイザー会議」の意見を発端に、門司港開発地区の船だまり埋め立て計画に対する反対運動が市民の間に広がっていた。

このような背景の下、「門司港レトロ事業」は旧三井倶楽部の移築・復元と船だまりの保全とを重点内容として、市当局のみならず市民も巻き込みながら推進されていくこととなった。

2. 目標

歴史的建造物や美しい自然を活かしつつ門司港地区を「レトロ」をコンセプトに再生させることを目標とした。

3. 取り組みの体制

門司港レトロ地区の観光振興と地域の活性化を民間と行政とが一体となって推進することを目的として、1995 年 12 月に「門司港レトロ倶楽部」(任意団体)が設立された。

「門司港レトロ倶楽部」が設立される以前から存在する団体に「門司まちづくりネットワーク」(1995 年春設立)があった。これは門司港のまちづくりに民間で取り組むことを趣旨とした団体で、6 つの市民団体により設立されたものであった(6 つの市民団体＝門司まちづくり 21 世紀の会、門司みなと商店街振興組合、門司の躍進を考える会、門司港バナナの叩き売り保存会、まちづくり活性化もじ、門司の景観を考える女性の会)。その団体の活動を通じて、観光振興と地域の活性化を民間と行政とが連携して行おうという機運が盛り上がったことから、上記 6 団体と行政、観光協会、民間関係団体が共同で設立したのが「門司港レトロ倶楽部」である。

〔門司港レトロ倶楽部の構成〕

以下の 8 つの市民団体、11 の民間企業、4 つの行政組織から成る。

(1) 市民団体

『門司まちづくりネットワーク』に加入するまちづくり6団体]

- ① 門司まちづくり 21 世紀の会 / ② 門司みなと商店街振興組合
- ③ 門司の躍進を考える会 / ④ 門司港バナナの叩き売り保存会
- ⑤ まちづくり活性化もじ / ⑥ 門司の景観を考える女性の会

[他の市民団体]

- ⑦ 門司みなとまち倶楽部 / ⑧ 門司文化団体連合会

(2) 民間企業

- ① JR門司港駅 / ② NTT西日本北九州支店 / ③ 北九州商工会議所
- ④ 北九州活性化協議会 / ⑤ 北九州コンベンションビューロー
- ⑥ 門司港開発(株) / ⑦ 北九州市観光協会 / ⑧ 門司港郵便局
- ⑨ 出光美術館(門司) / ⑩ 門司地区タクシー協会 / ⑪ レトロパーク門司(指定管理者)

(3) 行政

- ① 経済文化局 / ② 港湾空港局 / ③ 門司区役所 / ④ 教育委員会



門司港 (資料:門司港レトロ倶楽部ホームページ資料を加工)

「門司港レトロ倶楽部」、「門司まちづくりネットワーク」はいずれも任意団体であるが、法人格を取得しない背景には、厳格にルールを決めず個々の団体の自主的な活動を尊重しようという考えがある。両団体に所属する市民団体のうち 2 団体は NPO 法人格を取得しているが(門司まちづくり 21 世紀の会、門司の躍進を考える会)、その他は任意団体である。

門司港レトロ倶楽部は団体の集まりである。したがって、個人や私企業が参加する場合には、いずれかの地元組織に属するか、団体として参加要望を出すことが必要である。その際、倶楽部の目的が地域の活性化と観光振興であることから、加入団体には、地域との関わりがあり、倶楽部の趣旨に賛同し、共に活動できる組織であることが求められる。民間企業に関しては、この地域に立地するもので、かつ、公益性が高いものであることが要件と考えられる(明文化はされていない)。倶楽部会員は、まちづくりに自主的に取り組むことを旨とした団体であり、サービスの提供を受けるものではない。

4. 具体策

(1) 「門司港レトロ事業」の実施

「門司港レトロ事業」で整備された施設は以下の通りである。

[門司港レトロ第 1 期事業] (事業期間: 1988 年度～1994 年度、総事業費: 約 290 億円)

旧門司三井倶楽部の移築修理等歴史的建造物保存活用事業、レトロプロムナード、めかり回遊路、レトロ広場、大連歴史的建造物建設、船だまりの整備等

[門司港レトロ第 2 期事業] (事業期間: 1997 年度～2001 年度、総事業費: 約 300 億円)

門司港ホテル、門司港レトロ観光物産館、海峡プラザ、門司港レトロ展望室、駐車場、トイレ、遊歩道の整備等

これらの施設を有効活用しつつ、「門司港レトロ倶楽部」がさまざまな観光振興策(イベント等)を実施してきている。

(2) 「門司港レトロ倶楽部」の活動

① 組織の運営状況

「門司港レトロ倶楽部」は総会、理事会、2 つの委員会を設けており、総会は年に 1 回(6 月)、理事会は 3 回、委員会は月 1 回程度開催している。

理事にはすべての団体から 1～2 名ずつ就任し、委員会メンバーには各団体から推薦された人が就いている。委員長を選定はメンバーの互選によっている。委員会は「企画委員会」及び「事業委員会」であり、企画委員会が以下の事業に関する企画提案を行い、事業委員会が実施している。

①「門司港レトロ地区活性化の方策」検討と提案

②まちづくり研修会・視察の実施

- ③門司港レトロ情報誌(レトロタイムズ)の発行、レトロPR(各種ポスター、チラシの発行、イベントカレンダー発行等)、ホームページの管理運営
- ④イベントの企画・実施(レトロフェスタ、レトロの夜、サマーイベント、バナナフェア、レトロイルミネーション、カウントダウンなど)、市民イベントの募集

予算は、市からの助成と各団体負担金、協賛金等で成り立っている。

団体負担金は会費的な位置づけであり、協賛金はイベント開催時における民間等からの協力金である。団体負担金はレトロ倶楽部に参加する団体単位で徴収されるもので、1口1万円として団体の資金力に応じて口数が決められている(負担口数の明文規定はなく、それぞれの組織の毎年の財政状況等に応じて柔軟に変更が可能な仕組みになっている)。

広報は観光宣伝部会が中心になってレトロPR、情報誌発行、ホームページ作成を行っている。情報誌は年2回(6月、12月)、各3万部を発行している。ホームページへのアクセスは2006年3月までに81万4千件あった。2005年にリニューアルしたことにより同年は前年より21万8千件も増加した。

倶楽部は年に2回程度先進事例の視察を行っている。視察先は神奈川や金沢など歴史的な建造物を保存している地域が中心である。なお、「門司港レトロ倶楽部」の設置、運営に関しては他地域を参考にはしていない。まちづくり団体を含む団体を組織している事例が国内には見当たらないこと、また民間と行政の協力体制が10年余にわたり継続している事例が稀であること等がその理由である。



門司港レトロ地区俯瞰 (資料:門司港レトロ倶楽部)

② イベントの開催

2005 年度に実施した主なイベントは以下のとおりである。

2005 年度に実施した主なイベント

時期	名称	開催日	集客数
春	レトロフェスタ	5/3～5	約 20 万人
夏	レトロの夜	8/6,20,27	約1万人
	サマーイベント	7 月、8 月	
秋	バナナフェア支援	9/17～10/30	
	門司港レトロ10周年記念 薪能	10/8	
	門司港バナナちゃん大会支援	10/9	
冬	門司港レトロイルミネーション	12/1～3/14	
	カウントダウン	12/31	約 7,000 人
	ふぐフェア	2/4～3/31	
	門司港レトロひなまつり	2/4～3/31	

(資料) 門司港レトロ倶楽部資料

2005 年に実施されたイベント総数は 235 件であるが、その主催者別内訳は市民・企業 128 件、指定管理者 23 件、門司港レトロ倶楽部 66 件、市 18 件となっている。門司港レトロ倶楽部主催イベントの中には、同倶楽部が市民から募集して採用したイベントが 54 件ある。

門司港レトロ倶楽部設立以前は、地元団体等が「門司港レトロイベント実行委員会」を組織して市のイベント開催予算を利用しつつ各種イベントを実施していた。門司港レトロ倶楽部設立後は、同倶楽部事業に対して市が負担金を拠出している。門司港レトロ倶楽部の総収入に対する市負担額は 7 割前後であり、これにレトロ倶楽部の他収入を加えて年間予算としている。

レトロ倶楽部に参加する各団体の個別事業は、門司港レトロ倶楽部とは別の独自予算により実施されている。それらの中には、関門海峡花火大会のように県境を越えた連携によって実施しているものもある。関門海峡花火大会は、行政からの資金援助や市民からの寄付金を元に、下関で活動しているまちづくり団体との協力により実施されている。

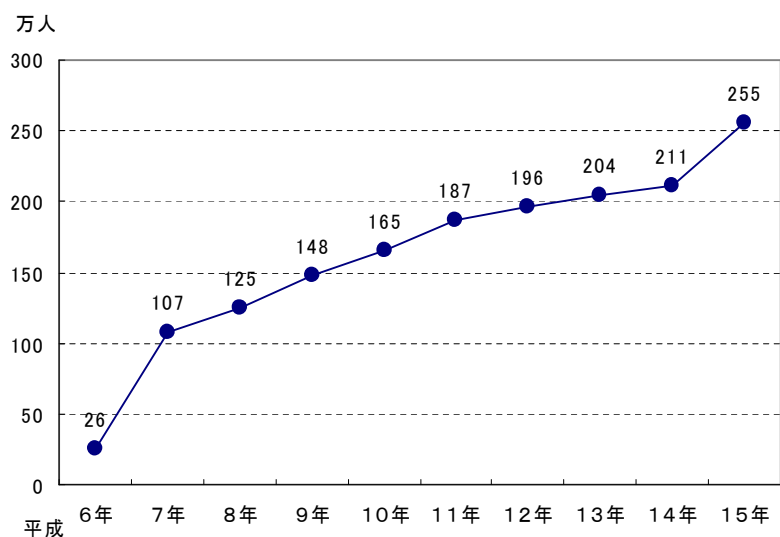
(4) 観光振興効果

門司港周辺に立地する歴史的建造物の保存を発端とした門司港レトロ事業第一期の推進は、レトロ地区への観光客を 1994 年のわずか 25.8 万人から 1995 年(第1期事業終了年)の 107 万人へと増加させた。また、第二期事業(1997 年～2001 年)及びレトロフェスタ等のイベントの実施によって、観光客は 1997 年の 148 万人から 2001 年の 204 万人へと増加し、200 万人を越えた。第二期事業終了後も増加を続け、2003 年は 255 万人と 250 万人をも越えた。観光客の増加状況は次のグラフの通りであり、関連する指標の変化は次の表のとおりである。

観光客数が右肩上がりの伸びとなった要因の一つとして、施設を段階的に整備したことがあげられる。時間をかけて継続的に整備を進めてきたことが、再訪者に新しい体験の場を提供することになり、それが再訪者や新しい観光客の更なる増加をもたらしたものと考えられる。また、イベント等

の定期的開催が来訪者に徐々に認知され、固定的なファンの確保につながったものと考えられる。そして、それらの背景には、単に表面だけの、場の系譜とは関係のないテーマパーク的空間づくりではなく、市民と行政とが一体となって地区の歴史を継承する草の根的で地道なまちづくりがあったわけである。

観光客数の推移



(資料) 門司港レトロ倶楽部

主要指標の1995年度と2003年度の比較

	1995年度	2003年度
観光客数	107万人	255万人
(内) 宿泊観光客数	12万人	36万人
年間駐車場台数(普通)	3万台	15万台
(バス)	3千台	1万8千台
レトロ地区店舗数	3店舗	60店舗
売上額	約3億円	約47億円
雇用者数	約30人	約670人

(資料) 門司港レトロ倶楽部

5. 特徴的手法

まちづくりはそれによって利益を享受する団体(例えばホテルや鉄道事業者等)が牽引して進められることが多いが、「門司港レトロ倶楽部」のまちづくり事業は観光的要素が強いにも関わらずそうになっていないことが一つの大きな特徴である。その背景には、歴史的建造物や船だまりの保存等に見られるように、まちは自分たちの共有の財産であるという意識が市民に共有されていたことがある。本当のまちづくりを行うためにはまずもって何が必要であるかを理解する上で、「門司港レトロ倶楽部」を中心としたまちづくりの事例は大変貴重である。

門司港レトロ倶楽部は出店を規制する権限を持っているわけではなく、テナントの斡旋・管理を行っているわけでもない。それにも関わらず、また、観光客が急増している地域であるにもかかわらず、まちの歴史的な環境がよく維持されているのは、市民の心に培われたまちへの思いと、それを損なう行為に対してははっきりと反対できるまちの空気、及びそれを尊重する行政等の存在によるところが大きいと考えられる(例えば民間の 31 階建マンション建設計画は市民活動により建築計画を変更している)。

このような環境を背景に、「門司港レトロ倶楽部」はゆるやかで柔軟な組織としてまちづくり活動の中心に位置している。各団体はレトロ倶楽部を拠点として、互いに持てる力を出し合いながら自立的に活動している。同倶楽部には各団体を縛る明文文化された要項や定款などはなく、団体負担金も各団体の能力と受益に応じて負担することになっている。負担金を一律にしよう、団体規模等に応じて課そう、という提案はなされたことがないそうである。レトロ倶楽部に参加している団体は、100 人を超える会員を擁するものから数名～数十名の会員のものまであり、組織形態も多様であることから、各々の組織ができることをするというのが原則である。負担金が出せない組織がある場合には、人材で賄う方法も取られている(例えばイベント会場の設営や運営などのための人材を多く参加させるなど)。「門司港レトロ倶楽部」自体がコミュニティになっている。

6. 課題

当初 3 年の予定だった市からの助成は、多少減額されつつもこれまで継続的に行われてきたことから、「門司港レトロ倶楽部」のまちづくり活動を安定的に維持し定着させることができた。しかし 10 年を経過したことで事業運営になれが生まれ、イベント準備のための会議等への欠席者が増加するなどの現象が見られるようになっている。また、イベントについては、行政の財政支援を受けず民間が自前で実施して利益を得る方向もあるのではないかという意見も出始めている。10 年の経過は会員の高齢化も生んでおり、メンバー構成も含め組織を再構築することも検討課題であると考
えられている。

一方、10 年間の取組によって門司港レトロ地区のハード整備はほぼ完了し、レトロ倶楽部への助成によるまちづくり活動も定着してきたことから、行政は今後は後方支援の役割に方向転換すべきであると考えられており、行政と民間との関わりを再検討する段階を迎えている。

また、門司港レトロ地区は地区面積が狭く回遊空間としては限界があることから、周辺地区に魅力を広げていくことが課題となっている(目下、山口県下関市と連携中)。

(参考・引用文献)

門司港レトロ倶楽部ホームページ